

菩提木遺跡

——国道291号線道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書——

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

菩提木遺跡

—国道291号線道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

関越自動車道、上越新幹線の建設は北毛地域の交通網に大変革をもたらしました。月夜野インター、上毛高原駅はアクセスする周辺道路網の整備を必要としました。上越新幹線上毛高原駅建設に関連する周辺整備の一環として国道291号の拡幅工事が実施され経塚である菩提本遺跡に影響が及ぶこととなり緊急発掘調査が実施されました。

以前道路工事を行ったおりに掘削され埋め戻しされていたもので遺構の状況は判明しない部分がほとんどでありました。経石は4、5センチメートルの平らな石に経文を一字づつ記したものであります。伝承によりますと、江戸時代初期に在地の僧が作ったとされますが、江戸期の信仰のありようを示す資料として貴重なものであります。

調査並びに整理事業を通じまして賜りました群馬県土木部、群馬県教育委員会のご配慮、ご指導に感謝申し上げます。

発掘調査、整理事業の担当者、作業員、補助員の労をねぎらうと共に本書が庶民信仰の研究の資料として近代社会解明のために広く県民の皆様にもちいられることを願いつつ序とします。

昭和57年2月15日

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水一郎

例 言

1. 本書は、国道291号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書である。
2. 菩提木遺跡は、群馬県月夜野町931-1番地に所地する。
3. 発掘調査は、群馬県沼田土木事務所の委託により（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団が下記により実施した。

調査期間 昭和56年7月27日～昭和56年8月2日

調査担当者 細野雅雄 （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

西田建彦 群馬県教育委員会文化財保護課

4. 本書の作成は下記の者が担当・協力した。

整理担当・編集 徳江 紀 齊藤利昭

本文執筆 井上唯雄 唐沢至郎 西田健彦 徳江 紀 齊藤利昭

遺構写真 細野雅雄 西田健彦

遺物写真 佐藤元彦

図版作成 保坂雅美

5. 本遺跡に関する調査記録及び出土遺物等は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
6. 本書の作成にあたり、下記の方々から指導・助言・協力・資料提供を賜った。

群馬県教育委員会文化財保護課 群馬県沼田土木事務所 月夜野町教育委員会

小林起久治 白石保三郎 沢井真之助 井上唯雄 近藤平志 中東耕志 相京建史

国定 均 笠原秀樹 山本朋子 吉田有光 柳岡良宏 関 正江 岸 トキ子

関口加津枝 立見美代子 田中精子 五十嵐由美子 植茶智龍 三宅敦気 中東彰子

(敬称省略)

凡 例

1. 遺構実測図中の方位記号は磁北を表す。
2. 遺構実測図中のコンタは標高429mから減じた数値である。
3. 遺構断面図中の基準線上の数値は標高であらわした。
4. 遺物写真は1/2を原則とした。
5. 第1図は建設省国土地理院発行の1/25,000地形図「後閑・猿ヶ京」を使用した。

目 次

序

例 言

凡 例

1. 調査に至る経緯	1
2. 発掘調査の方法と経過	1
3. 遺跡の立地と地形	2
4. 検出された遺構及び遺物	
(1)遺構	3
(2)遺物	6
5. まとめ	9

写真図版

1. 調査に至る経緯

高速交通網の整備に伴う上毛高原駅周辺は、急激な変化を遂げた地域である。本線工事は勿論のこと、駅前の整備を中心とした国道291号街路改良工事、月夜野バイパス道路建設工事が相次いで実施された。その中で月夜野バイパスと上毛高原駅周辺をつなぐ国道291号線道路改良工事の計画が持ち込まれたのは昭和56年度に入ってからのことであった。この工事計画に合わせてみて早急な対応を迫られたのが、この菩提木遺跡である。

6月はじめ、沼田土木事務所から連絡を受けた県教育委員会文化財保護課は地元月夜野町と共に現地調査を実施し、旧291号道路脇の塚が以前、道路拡張の際、川原石に文字の書かれたものが出土したこと、それをまた穴を掘ってそこに埋め戻したことを確認し、遺跡と認定した。工事は既に着手されており、発掘調査は緊急を要することを確認した。しかし、既に群馬県埋蔵文化財調査事業団の当年度事業はスタートをしており、調査担当者の確保は困難な状況にあった。

沼田土木事務所と協議を重ねた結果、

- (1) 調査は群馬県埋蔵文化財調査事業団で受託し、担当として細野雅男第三課長が当ること
- (2) 調査の万全を期すため、文化財保護課、西田健彦文化財保護主事が応援すること
- (3) 調査は当該箇所の工事を56年度内で実施するのに支障のない対応をとること

で合意し、昭和56年7月27日～8月2日に実施することになった。

2. 調査の方法と経過

今回発掘調査した塚が経塚であることは地元民の話から調査前にわかっていて、それによると、塚の西側にはかつて荷車1台が通過できる程度の幅員の狭い道があったが、国道291号線を建設する時に塚の西半部を削り取ってしまい、その際に経文を書いた川原石が多数発見されたことであった。なお、昭和の初期にはこの塚は古墳として認知されており、『上毛古墳総覧』（昭和13年、群馬県）には桃野村第2号墳として記載されている。

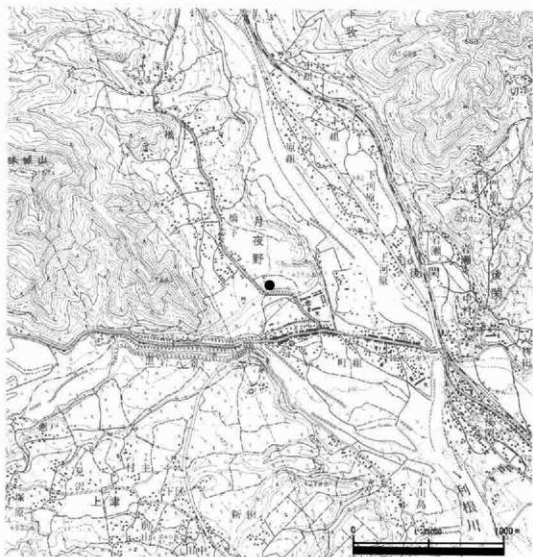
昭和56年度の国道291号線の改良工事では、新設のバイパスと現291号線とが立体交差し、現道が4～5m下がることになり、併せて拡張が行なわれるので経塚は、すべてが消滅してしまうこととなった。それ故、調査区域は経塚の残存部のすべてとなり、まず盛土部分の現形測量と西側断面の精査を行なった。断面精査作業中にはいくつもの経石が発見され、国道建設時に経石が見つかったという地元民の話を裏づけていた。

頂上部に祀られていた明治25年建立の石仏を移設後、盛土の南北を横断するトレンチを設定し、北盛土の状況と経石埋納施設の検出を試みた。重機を使用してトレンチの掘削を行なったが、盛土の北側部分は経塚構築当時の形状ではなく、殆んどが近年の盛土であることが判明した。その後、トレンチを拡張する形式で新しい盛土を取り除く作業を実施した結果、調査前の見かけの墳丘よりもかなり小規模の本来の経塚の墳丘を検出することが確認できた。

3. 遺跡の位置と地形

菩提木遺跡が立地する場所は利根川と赤谷川との合流点の北西にあたり、標高は429mである。利根川の右岸の最上位の河岸段丘面が赤谷川によって切断される南端の地区であり、遺跡地から南方を臨むと正面に月夜野町上津の段丘面が広がり、南流する利根川の東には赤城山の北麓全体が見渡せるという眺望の良い所である。周辺は桑園及び水田としての土地利用が主であるが、近年宅地化が進み始めた地区でもある。

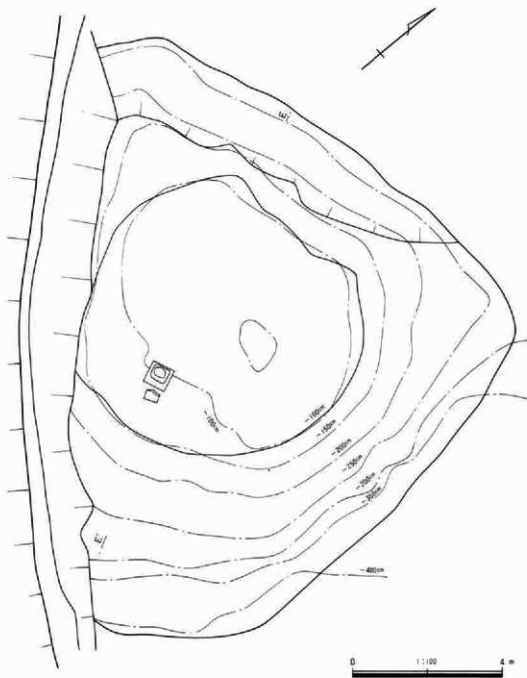
国道291号線は、利根商業高等学校の西を通り段丘面を登り上げる。経線はこの道路が段丘面を登りつめた曲り角東側に位置し、道路より2m近く西側を削り込まれている。



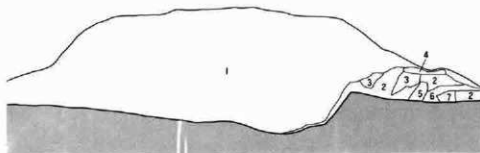
第1図 遺跡位置図

4. 検出された遺構と遺物

(1) 遺構



第2図 調査前平面図



第3図 盛土断面図



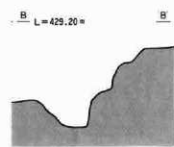
土層説明

- | | | | |
|---------|---------------------|---------|---------------------|
| 1. 黄褐色土 | ローム主体、礫多量に含む、近年の盛土。 | 5. 黄褐色土 | ロームの盛土、固くしまる。 |
| 2. 褐色土 | 粒子細かくしまり強い。 | 6. 褐色土 | ロームの粒子含む。 |
| 3. 褐色土 | しまり強く、攪乱うける。軽石混じる。 | 7. 黄褐色土 | ローム盛土、固くしまる。5層より固い。 |
| 4. 褐色土 | しまり弱く、攪乱うける。 | | |

調査前の現形測量からは、経塚は平面形が方形で1辺が約12m、高さは3.0mの規模を持つであろうと推定された。各辺の方向はほぼ東西南北を示しており、頂上部には7m×7mほどの平坦部があった。この頂上平坦部の中央南寄りの位置に明治25年建立の銘文を持つ石仏が1体南向きに祀られてあった。そして盛土の南西部およそ3分の1の部分は国道291号線の建設によって切断されてしまっていると考えられた。

発掘調査が進むにつれて、経塚の周囲を覆い隠すような二次的な盛土がなされていることが判明した。この二次盛土を取り除くと、3m×5mの範囲に構築時の盛土が残存している状況を検出することができたのである。原形ともいべき盛土の北側の部分は土が取り去られてしまい、ひどく変形していた。また、西側は道路によって既に削平されてしまっていた。比較的残りの良かった南東部及び北西部の状況から原形を復原すると、経塚は径5mほどの円形又は、方形のプランを持ち、盛土の高さはおよそ1.5mのものであったと考えられる。盛土は周囲から中央に寄せ集めるような方法で盛り上げられており、版築による工法はとられていない。盛土の表面には20~40cm程度の大きさの石が数個認められたが、墓石と言えるほどではなく、頂上の部分を鉢巻状に一周していたものかも知れない。

軽石の埋納施設は中央部にわずかに残っていた。南北95m、東西20cm、深さ20cmしか残っていないが、磁北に合致した方位で、方形のプランであった。埋納施設付近には攪乱穴があり、ここからも多量の軽石が発見されているが、これは掘り出された軽石を埋め戻した穴と考えられる。



C L=429.20m

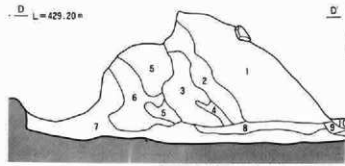


C' 土層説明

- I 攪乱 ローム混じり。
- I' 攪乱 礫石含む。
- II 茶褐色土 礫石含む。
- III 黒色土
- IV 黄褐色土 ロームブロック。
- V 白色土粘土層

- 1. 褐色土 細粒、しまり強い、軽石有
- 2. 褐色土 しまり強く、軽石、ローム粒子含む。
- 3. 黄褐色ローム
- 4. 攪乱
- 5. 明褐色ローム
- 6. 黄褐色ローム
- 7. 灰褐色土 粘性あり、礫含む。
- 8. 褐色土 粒子細かく、7層鱗状に含む。
- 9. 黒褐色土 8層少量含む。
- 10. 攪乱

D L=429.20m



第4図 経塚実測図

(2)遺物

経石

菩提木経塚出土遺物の殆んどは経石で4,000点を超える。その他にガラス製しょう油差しのふた、近代陶器片各1が出土している。調査によって、経塚の大部分は既に破壊され、経石も原位置をとどめるものが少ないことが判明した。地元民の話からは、戦前の道路

工事で経石が出土したため、再度埋め戻したとのことである。原位置と推定されるのは第1表の粘-1である。それを含め

出土地点	個数	判読数	筆跡による分類			
			A	B	C	不明
K-1	1872	998	177	346	456	19
K-2	342	151	35	82	34	
K-3	81	14	8	6	0	
K-4	295	123	26	81	16	
粘-1	1140	466	86	356	23	1
その他	312	159	18	132	9	
計	4042	1911	350	1003	538	20

筆跡による分類の基準

- A-1個人 (A) の筆跡と推定できるもの
- B-2～3人の筆跡があると推定できるものの分類判別が難しい為、一括してBと分類したもの
- C-1個人 (C) の筆跡と推定できるもの
- 但し複数 (2人) の可能性もある
- 不明-判別が難しいもの。梵字を含む

(写真参照)

出土地点のK-1は、覆乱孔1の略

て出土地点・個数・判読数及び筆跡の分類は第1表のとおりである。

経石は全て川原石を使用し、石質は選んでいないようである。大きさ、形状もまちまちで、大きいものは25cm×20cm位の偏平なものから、小は1cm×1cm程度のものまでであるが、多くは長径10cm～3cm位の間にいる。形状は偏平なもの、厚みがあるもの、角ばったものなど多様で、なかには、割れた石の使用もある。特に石を留意して選別した様子はなく、字の書ける川原石を無雑作に持ってきたように見受けられる。

経石の分類

分類にあたり、出土地点が既に覆乱を受けていることから、筆跡の違いによる分類を示す。A・B・Cは、第1表の分類である。文字上の表・横・裏は、文字が石の各々の面に書かれていることを示すが、読み方の順序は不明である。左肩の数字はその文字の頻度数を表す。□は読み方不明の文字・右下の?ははっきり判読の難しい文字・偏や傍の?は、その部分が不明の文字を示す。

A

一石多字のもの

□中内西 摩□□□□□ 記□経□ 折疑欲自 病即滅消示 集巨集 一人横 三穴多□ 廻充
 摩□ 求□ 衆生 負□ 妙衆 堂香 各右 如来 卒求 妙法 種禄 不得 一切□ 諍□司
 會任新□?□□□

一石一字のもの

2行³摩完己書正知婆闍敬
 2見²又卷葉寺小土本總罕
 2右²白古廣悉助中破覺鬚
 3佛²虫角照生曾等法時兀弓
 3人²當旣顏女上壇必通羈共
 3長²刀輕興象除度復棘臂糾
 3尊²得偈功其山道夫窩稱別
 3者²提血此莊石陀七雷余故
 3歲²想禪現茶總地福羅統可
 3薩²諸應問祖支德布利虛仿
 3衆²切奧義思充男文米皆合
 3金²世遠健師沙通木耶時篋
 3月²西惡丘厲藏他平有右草
 3觀²子衣及秀囑導暮未餓種
 3情²信於宮舍說天膝滿芍身
 3阿²所雲切荏乘第秘無跣邪
 3菩²四井覺護而多分毛才介
 4若²時作空獄普善風聞而教
 4我²供合弘講座宿尼轟草
 4音²言量故孝自聲念實施離
 5是²起²林園各佐在汝門成高
 6大²故²亦因慶至乃忍萬姦慙

B

一石多字のもの

達勿¹吉¹勞¹來¹空¹白¹ 子¹ 無¹ 關¹ 諸¹聲¹經¹典¹諸¹佛¹大¹乘¹ 世¹不¹ 尊¹信¹ 七¹寶¹妙¹塔¹
 香¹常¹ 其¹南¹無¹ 靈¹中¹詣¹ 無¹量¹衆¹ 利¹賢¹故¹且¹ 訖¹ 施¹ 正¹坐¹生¹ 為¹永¹道¹佛¹故¹
 却¹ 却¹ 外¹小¹ 大¹ 信¹女¹妙¹故¹ 前¹阿¹ 木¹金¹上¹座¹玄¹ 立¹起¹至¹如¹ 白¹佛¹記¹者¹
 為¹也¹ 實¹如¹ 王¹ 天¹ 建¹之¹ 如¹真¹ 第¹ 一¹ 揭¹ 一¹三¹ 大¹ 是¹ 世¹言¹
 宮¹月¹ 世¹行¹ 言¹經¹ 正¹悲¹ 經¹ 受¹ 閑¹安¹ 我¹ 時¹不¹ 是¹ 諸¹施¹ 天¹玉¹ 悉¹ 之¹
 阿¹羅¹ 基¹就¹ 不¹我¹ 我¹ 內¹ 每¹量¹ 時¹天¹ 得¹ 世¹法¹ 不¹故¹ 出¹往¹ 師¹ 木¹ 斷¹丘¹
 王¹佛¹ 二¹三¹ 文¹殊¹ 若¹命¹ 六¹木¹ 秋¹ 積¹ 利¹ 力¹內¹ 何¹何¹ 頭¹白¹ 一¹禹¹ 受¹記¹ 讀¹誦¹
 夜¹ 受¹業¹ 卒¹干¹ 王¹ 一¹坎¹ 誓¹經¹ 我¹ 亦¹ 唾¹口¹ 恒¹法¹

一石一字のもの

18不¹ 13若¹ 12一¹ 12法¹ 11言¹ 11善¹ 11是¹ 10世¹ 10生¹ 9王¹ 9大¹ 8我¹ 8佛¹ 7諸¹ 7二¹ 7而¹ 7中¹ 6其¹ 6尊¹ 6道¹ 6人¹ 5月¹
 5作¹ 5三¹ 5者¹ 5天¹ 5無¹ 5有¹ 5子¹ 5是¹ 5於¹ 5所¹ 5得¹ 5多¹ 5天¹ 5日¹ 5亦¹ 5羅¹ 5如¹ 5寺¹ 5持¹ 5女¹ 5香¹
 4喜¹ 4此¹ 4音¹ 4金¹ 4及¹ 4義¹ 4空¹ 4至¹ 4身¹ 4三¹ 4自¹ 4當¹ 4長¹ 4南¹ 4白¹ 4波¹ 4來¹ 4力¹ 4真¹ 4心¹
 3受¹ 3聲¹ 3種¹ 3千¹ 3解¹ 3己¹ 3安¹ 3弟¹ 3右¹ 3之¹ 3或¹ 3皆¹ 3見¹ 3春¹ 3邪¹ 3目¹ 3門¹ 3深¹ 3田¹ 3知¹
 2茶¹ 2毒¹ 2地¹ 2丁¹ 2聽¹ 2念¹ 2內¹ 2百¹ 2母¹ 2八¹ 2聞¹ 2病¹ 2火¹ 2方¹ 2故¹ 2高¹ 2具¹ 2履¹ 2吉¹ 2求¹
 2利¹ 2正¹ 2衆¹ 2鏡¹ 2山¹ 2常¹ 2時¹ 2除¹ 2少¹ 2處¹ 2千¹ 2光¹ 2經¹ 2國¹ 2宴¹ 2畏¹ 2怨¹ 2現¹ 2學¹ 2第¹ 2穴¹
 善¹ 上¹ 鏡¹ 風¹ 往¹ 會¹ 具¹ 江¹ 阿¹ 夷¹ 衣¹ 唯¹ 為¹ 逸¹ 希¹ 共¹ 告¹ 能¹ 告¹ 合¹ 高¹ 長¹ 景¹ 宮¹ 登¹ 局¹
 護¹ 丘¹ 含¹ 角¹ 下¹ 弓¹ 各¹ 見¹ 隨¹ 厚¹ 功¹ 險¹ 誦¹ 仇¹ 甚¹ 座¹ 從¹ 坐¹ 捨¹ 前¹ 聖¹ 在¹ 神¹ 誦¹ 臭¹ 趣¹ 則¹ 慈¹ 石¹
 外¹ 今¹ 歌¹ 宣¹ 莊¹ 施¹ 隨¹ 奧¹ 甚¹ 座¹ 從¹ 坐¹ 捨¹ 前¹ 聖¹ 在¹ 神¹ 誦¹ 臭¹ 趣¹ 則¹ 慈¹ 石¹

や「五部大経」（「華嚴経」・「大集経」・「大品般若経」・「妙法蓮華経」・「涅槃経」）、その他「観音経」・「無量義経」・「観普賢経」・「大日経」・「弥勒経」などが知られている。この中で、最も多い用経は「妙法蓮華経」である。

本件の分析に際しては、以上のなから使用例の多い、「無量寿経」・「観無量寿経」・「阿弥陀経」・「妙法蓮華経」・「無量義経」・「観普賢経」を参照しながら特定を試みた。

なお、前項で示されたように、本件は3種類の筆跡が確認されているので、A・B・Cのそれぞれについて、次いで全部をあわせて検討をおこなった。遺物の判読された文字を、經典文字と照合したところ、「浄土三部経」はいずれもが比較的短い經典であり、文字の上からも適合せず、「妙法蓮華経」以外の諸経も同様に該当しないことが判明した。

しかしこのことが、本件が「妙法蓮華経」であることを決定するものとはならない。「妙法蓮華経」自体は巻第一から巻第八まで、「序品第一」から「妙法蓮華経普賢菩薩觀見品第二十八」までの69,828字に及ぶ大経である。これに対して、本件で判読できたものは1,911点にすぎず、本件が仮に「妙法蓮華経」であったとしても、全体の3%以下であるので、単に可能性があるとされるにとどまる。ただ一石多字のものの中に「病即滅消示」があり、これが「妙法蓮華経薬王菩薩本事品第二十三」の中に「病則消滅不老不死」の語に通ずるところがあることから、施主が「妙法蓮華経」を熟知した者であることを想起させる。

さらに、「妙法蓮華経」とに関わるものを掲げるならば、「七寶妙塔」が同経提婆達多品第十二の中の「礼拝供養七寶妙塔」・「同経從地涌出品第十五」の中の「各詣虚空七寶妙塔多寶如来釈迦牟尼仏所」の語があり、「衆妙」は「同経序品第一」に「衆妙臥具」として見えている。また、「龍宮」は前記「第十二品」にのみ認められ、「母」は「同経妙莊嚴王本事品第二十七」に特出する。加えて、「妙法」や「檀香」は各品に数見する。

以上より推定するならば、先に述べたように、本件が「妙法蓮華経」である可能性が強く、經中の「序品第一」・「同経提婆達多品第十二」・「同経從地涌出品第十五」・「同経妙莊嚴王本事品第二十七」の名品が含まれていたことが考えられる。

(唐澤至朗)

(参考文献)

- | | | | |
|--------------|----------------|------|--------------|
| 国民文庫刊行会 | 『国譯大藏経』 | 国刊行会 | 1935年(昭和10年) |
| 財団法人 東洋哲学研究所 | 『法華経一字索引』 | 同研究所 | 1977年(昭和52年) |
| 石田茂作・他 | 『新版仏教考古学講座』第六巻 | 雄山閣 | 1977年(昭和52年) |
| 三宅敏之 | 『経塚論』 | 雄山閣 | 1983年(昭和58年) |

5. まとめ

経塚の発生は平安中頃とされ近世にまで続いている。菩提木経塚は径5m程の円形(又は方形)の規模で、礎石経(一字一石経)を埋納したものであるが、昭和9年頃の道路工事の際に大部分が破壊され、発掘調査からは、経塚築造の目的・時期等ははっきりしないものの、状況からは近世のものとして推定された。経石からは、經典が「妙法蓮華経」の可能性が示され、少なくとも3名の手で筆写されている。

地元には伝わる話に、この付近には大きな松があり、その存在は遠く総社方面まで伝わっていたというのである。⁽¹⁾⁽²⁾ その松について、小川城根元記に次のように記されている。

菩提木一本松の事

天正年中北条氏邦小川可齋合戦之時 人多く死ス 依之其後は暮六ツ時より其異魂出人之
通路難成 諸人難義ニおよひ候故 岳林寺天慶和高大施我鬼致シ 塚ヲ築キ松ヲ植る 今之松
是也 其後享保八年地藏尊建 同十八年宝篋印塔建ル 是よりして異魂之禍ひなし

岳林寺天慶和尚は、寺伝に依れば天正以前の永禄5年に没しており、又、前記文書を伝承を
集成したものと考えられることから「塚ヲ築」も事実と確認できないが、これを信ずるとすれば
近世初頭のものとなる。しかし、享保年間に「地藏尊」「宝篋印塔」が建立されるとあり、何らか
の行事(追善供養)が行われたのであろうし、この時経石を埋納したことも考えられる。現在地
蔵尊・宝篋印塔は無く、明治25年建立相州最乗寺と刻む不動明王石像が安置されていたが、今は
バイパス際に置かれている。⁽¹⁾⁽³⁾ いずれにしろ、一石多字の文の分析・他の経塚発掘の類例を待ち検
討を進めたいが、当地域に経塚を築いた信仰集団があり、その事実を伝承した人々の存在をうか
がわせる好資料といえよう。

(注1) 月夜野町文化財調査委員 武川健治氏教示。

(注2) 月夜野町月夜野 橋本朝治氏所有、小川城興亡の伝承と、小川・赤松・真田家系図、その他地域の伝承と火災等の記録を集録。文久3年の火災記録による事から江戸末の編さんであろう。

(注3) 月夜野町教育委員会・岳林寺住職 植茶知龍氏教示。

(注4) 昭和9年の道路工事で礎石と共に四角な石も出土したという。その石は寿命院に運ばれたというが現在不明。

写 真 图 版



経塚調査前



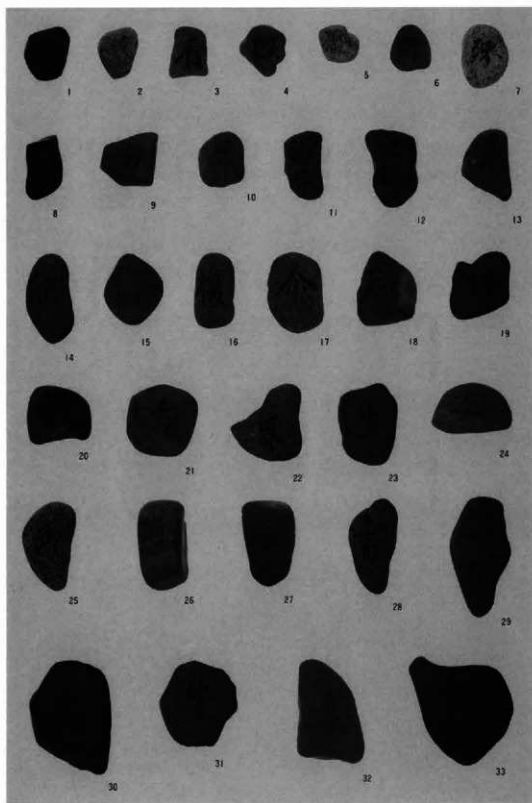
盛土断面



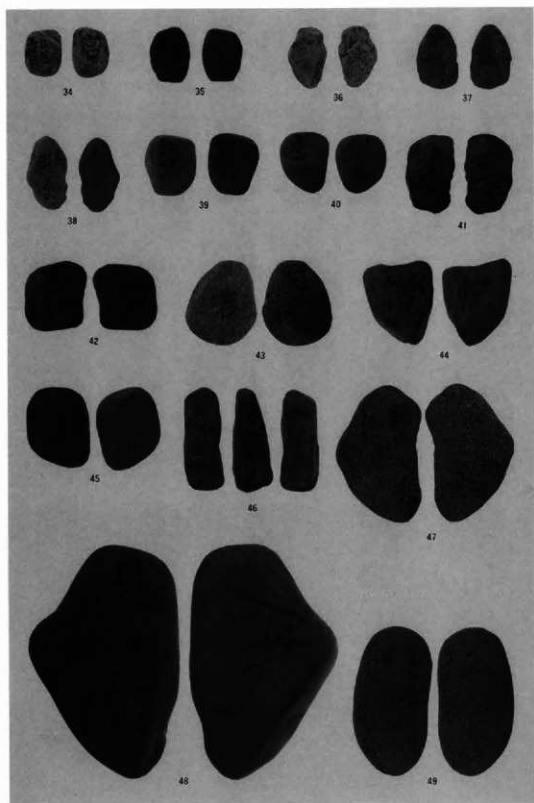
経塚本体



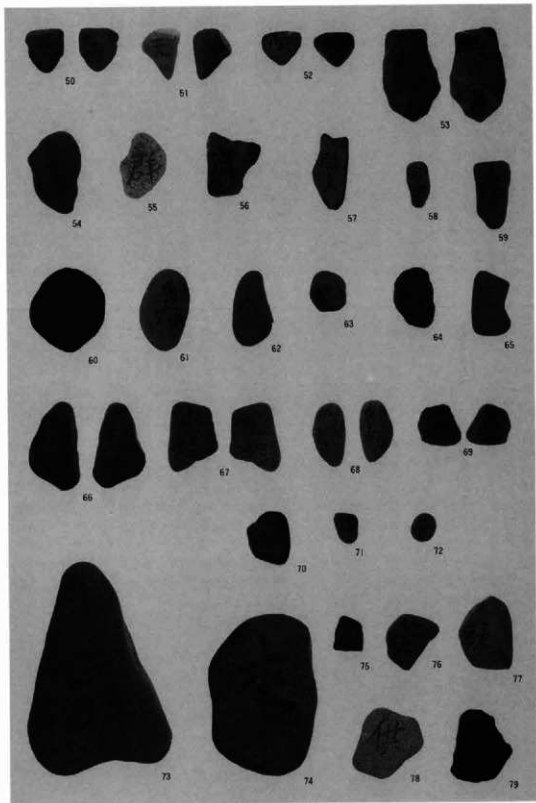
経塚盛土断面



経 石(1)



經 石(2)



經 石(3)



經 石(4)

菩提木遺跡

国道291号線道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和57年3月26日 印刷

昭和57年3月31日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北碓村大字下箱田784番地の2
電話（0279）52-2511（代表）

印刷／朝日印刷工業株式会社